

「なんで、あんたはそんなに義父さんに弱いのか？
会社から前借したお金、誰に渡していると思ってるん……」

その頃、自分を顧みない次郎に不満も言わず耐えていたトミエが精神のバランスを崩しはじめ、里子は困っていた。

病気の原因である次郎が亡くなってから、トミエは徐々に明るさを取り戻してきたが、彼女が大声で笑うのを里子はついに聞くことはなかった。

由良から帰った翌朝、里子はハルの店へ行くために、昨夜から居間に置いたままになっている旅行

子供たちの成長を認めたくないように。

里子はへこんでいる箱の蓋をして、封を切っていないもう一つの箱といっしょに紙袋に入れた。

それを自転車の籠に積んで『はまゆう』へ向かう。

雪が解けた国道を車が走り、田んぼでは小鳥たちがせつせつと虫を啄み、野良犬は震えながらも勢いよく路地を駆け抜けて行く。そんな生き物

たちの元気を羨ましく眺めながら、自転車を走らせていると、今まで何度も繰り返した思いの中へ里子はまた迷い込んでしまう。

（あーあ。私はもうすぐ人生の折り返し地点が来るというのに、一日中誰とも話さず、このまま朽ち果ててしまうのかしらん。嫌だなあ。淳一は

カバンから、キスチョコの箱を取り出した。二箱のうちの一箱は夜行列車の中で旅行カバンを枕にしたとき頭で押さえたのか、少しへこんでいた。へこんだ方の箱を開け、銀紙で包まれた小さなキスチョコを一握り取って、テーブルの上に置き、三個食べた。あとは冷蔵庫で保管する。カレーを作る時に一、二個入れると、コクがでるよ。うな気がするからだ。

子供たちが小さかったじぶんは、喜んでいた土産もいつの間にか飽きられて、食べるのは里子だけになった。日本のチョコレートも安くてみんな製品が豊富にあるので、もう買ってこなくていい、と言っても淳一は買ってくる。まるで、

義父さんのように浮気もしないで、真面目に働いてくれるけれど、今のままで私の人生は待たされるばかりで終わってしまえそう。彼に反対されても仕事に行き、鬱陶しいけれど世間や人と繋がっていたい……）

急に海風にあおられて、我に返ると『はまゆう』

のドアの前まで来ていた。

開店したばかりの店内は静かだった。

「里ちゃん、失礼やけど前に会ったときよりちょっと太った？」

ハルは独り暮らしの先輩である。

「子供たちがいなくなつて五キロも太ったわ。美味しいとか不味いとか、何も感じないで、ただ

口に運んで空腹を満たしている食事がいけないのかしらん……」

店のカウンターにキスチョコの箱を置きながら、里子は悔む。

「それはね。独りのせい……。テレビを見ながらもくもく食べるでしょう。いつの間にか思わぬ量を食べてるのよ」

こう指摘されて、里子はなるほど、と思う。

もともと居酒屋だった『はまゆう』は、ハルの夫が亡くなってから、昼は喫茶、夜は居酒屋の二足のわらじを履くようになった。店内は真ん中に長いカウンターがあり、その後白いクロスをかけたテーブル席が五つだけの小ぢんまりした

店だ。

「子供でもいたら、もつと欲出して店大きくしようなんて、思っていたかもしれないけれど、あの人は夫婦なんとか食っていったらいい、っていう人だったから……」

こう言いながら、ハルはトミエに似た大きな瞳を瞬いていた。

「ほんと、おじさんって、おばさんがいたら何にもいらないうって感じだったもんね」

「あの人が亡くなったとき、店閉めようかと思っただけど、これからますます淋しくなるんだったら、細々とでもやっていたら、馴染んでくれたお客さんとあの人の思い出話などできるかなって考

えたわ。もう、どうあがいてもこれ以上の生活はないし、欲しいとも思わないし」

ハルはこんなふう語りながら、トミエにはなかった白くてふくよかな手をときどき目頭に当てていた。

「ふうん、おばさんって強いんだな」

「そんなことないよ。淋しくて何度天国のあの人を恨んだかしれやしない」

「待たされるばかりの身には、おばさんの気持ちわかる気がするわ……。ところで、話って何？」

「ああ、そうだった。実はね、松代さん大阪にいる娘さんのところへ行くんだって。うちの人が死んでからずうっと店手伝ってくれてたけど、

仕方ないわ……」

唯一人の雇い人である松代は、若い頃に夫と別れて女手ひとつで育てた娘がいるそうだと。

「そうなの。いい人なのに残念やな」

「そこで、相談だけど、あんたにこの店手伝ってもらえないかと思ってる……」

「えっ、私に？」

「嫌だったら断ってくれてもいいのよ。いつでも、この店閉める覚悟はできてるんだから」

「えーっ。もしかして、わたしの返事次第で店の運命決まるんやろか。そうやったら、軽はずみな返事はできんなあ」

「おばさんね。実は前から里ちゃんのこと目つけ

てたんよ。この仕事に向いているんじゃないかって……。いや、変な意味じゃないんよ。明るくて、人の心をそらさないって感じが……」

ハルは熱いキリマンジャロコーヒーのお替りを里子のカップに注ぐ。

「そんな……」

「あんだどこのお店……」唐突に、列車の中で会った男の素っ頓狂な声が蘇って、里子の頬を緩ませた。

「返事、もう少し待ってもらってもいい？」

「いいわよ。こんなことすぐに決められることじゃないもの」

ハルがキスチョコの銀紙をむいて、口に入れよ

うとしたとき、ドアの開く音がした。

「おはようございまーす」

里子が振り向くと、松代が首に巻いていたマフラーを取っていた。

彼女は六十過ぎだと思いが、きゃしゃな体つきで筋肉質だった。肌も色黒で、どちらかといえばトミエに似ていた。

松代はすぐに奥へ引っ込み、仕込みをはじめた。

「松代さんみたいに、わたし料理できないわ」

急に里子は不安になってきた。

「里ちゃんは、喫茶の方だけ手伝ってくればいから。お昼の定食も少し出してるけど、盛りつけと配膳だけ、手伝ってくればええんよ」

心配顔の里子にハルは言った。

「夜は？」

今度は、窓を見詰めていたあの男の横顔が

里子の脳裏に浮かんできた。

（夜も手伝ってって、おばさんに言われたら、あの男に予言されたみたいで、気持ち悪いな）

「ああ、夜はほとんどお馴染みさんばかりやから、わたしだけで大丈夫」

「そうよ。あれは女将さんの趣味みたいなもんやけん」

奥からでてきた松代が笑っていた。

「デザートなんかは、どうすればいいのかしら？」

「そんなのは簡単よ、アイスクリームの作り方だ

け覚えてくれれば……。マニュアルに従ってデ

コレーションすればいいだけよ。まだしばらくは

松代さんいるし、内のことはわたしがやるから、任せて」

ハルがおどけた調子で豊かな胸を叩いたので、そのおおげさな仕草に里子と松代は声を上げて笑った。

紙ナプキンの畳み方や、テーブルクロスの数き方などを教わっているとき、アベックの客や、女性連れ客などが入ってきたので、里子は『はまゆう』をあとにした。

それから何日も考えたけれど答えが出せない里子にハルは、一週間いや三日でもいいから店

にでてみて、それから決めるのもいいではないか、と提案してくれた。ありがたかった。はい、やります、と言って勤まらなかつたら恰好がつかない。里子は結婚してからフルタイムで働いたことがないので、体がついていくかどうかとも心配だった。

「まだしばらく松代さんもいるので、いろんなことを教えてもらえばいいし、しんどかつたらいつ上がつてもええけん。気楽にやってよ。冬場は客が少ないから、慣れるにはちよっどいいかもしれない」

そこまで言ってくれるハルに、迷ってばかりいても悪いので、里子はひとまず引き受けることにし

た。

「あれっ、新しい人？ お嬢さんとはいかないけど、なかなか感じのいい人じゃない」

「……………」

長かった髪を切つて若返つたつもりで、常連客の反応を複雑な気持ちで受け止めていた。

7

「わしらはハルさんと一緒に年取つてきたけん、今さらピチピチギヤルが現れたら、来にくくなるよ。あんたくらいがちよっどええわ」

ハルの入るコーヒーに惚れているという近所に住む田原に言われて、里子は少し肩の力

が抜けた。

一週間もすると夜の遅いハルに代わつて店を開けるのは、里子の仕事になった。松代が来るま

でに店内の鉢植えに水をやり、カウンターを拭き床を掃き、テーブル席のクロスを点検して一輪さ

しの花を差し替える。店内の装飾は三人の中で一番若い里子の感性で工夫してくれ、というハル

の希望なので、花も出勤途中の花屋で買つてくる。余裕があればカーテンの埃を掃除機で吸い取り、海を眺めながらガラス窓も磨く。

窓の外の海が灰色の日は、ふいに実家の母に言われた言葉が浮かんでくる。

「船員の女房のくせに、あまり天候を気にかけ

ん子や」

本当は台風の進路と淳一の船の位置はしよっちゆう気にしているのに、心配しているところを人にさとられるのが面映くて、

「へえ、台風、来よんな」

なんでも異常なくらい案じて見せる母の前で、里子はすつとぼけていたものだ。

しかし海に近い『はまゆう』を手伝いはじめてからは、もつと天候を気にするようになった。

瀬戸内海が穏やかで波静かな日は客が多いし、低く雲がたれ込めた日は少なかった。意外なのが雨の日だった。一見客が入れ替わり立ち替わり飛び込んでくる。

8

(以上7月1日放送分)